演劇の灯を消すな！

―新型コロナの猛威と闘う―

■コロナ対策日記①

【PARCO劇場】

「緊急事態宣言」を受けて幕は二度と上がらなかった

初日を開けると言いながら最悪の状況に備える

新型コロナウイルスとの闘いは1月中旬から始まった。『ピサロ』はPARCO劇場オープニングシリーズ第1弾ということもあり、気合が入る。それは舞台制作のみならず、劇場で販売するグッズ制作も。数種類のグッズ販売を計画、縫製などは中国の工場で生産することになっていた。

「中国でインフルエンザではない感染症が流行し、工場が閉鎖されたらしい」と一報が入った。国内生産に切り替え、問題はクリア。

毛利美咲
（プロデューサー）
もうり・みさき／1998年12月に（株）パルコ入社。最近のプロデュース作品に『猟銃』（11・16年、フランソワ・ジラール演出）、『豊饒の海』（18年、マックス・ウェブスター演出）また、『良い子はみんなご褒美がもらえる』（19年、ウィル・タケット演出）、『転校生』（19年、本広克行演出）、現在上演中の『大地 Social Distancing Version』をはじめ、パルコ製作の三谷幸喜作品のプロデューサーを務めている。

[1月29日（水）] 演出のウィル・タケット氏が来日。空港はいつもと変わらない気がした。しかし、なんとなくモヤッとしたものがあり、31日から始まる稽古場用に手指除菌、うがい薬、稽古場内に噴霧する除菌液を4ガロン、ペーパータオルを大量買いする。

[1月31日（金）] 『ピサロ』稽古初日。渡辺謙さんをはじめ稽古場には80名ほどが集まった。この時期に最も気をつけなければならないのはインフルエンザ。今回は新型コロナウイルスが加わった。我々ができることはこの稽古場を「安全な空間」に保つこと。その状態をつくるためには、人の出入りを最小限にとどめること。私のもどかしさを感じた謙さんが顔合わせの最後に皆に向かって声をあげてくれた。「この稽古場にウイルスを持ち込まないために、どうか稽古に関係のない方はお越しにならないでほしい」と。この言葉から『ピサロ』の稽古はスタートした。

[2月7日（金）] 6日後に来日するデザイナーから、新型コロナウイルスの感染状況についての質問が届く。クルーズ船のニュースが英国でも大きく取り上げられたらしい。「日本は安全なのか」「感染した場合の保険はどうなるのか」という問い合わせ。もし「来たくない」と言われたら、と怯える。稽古場へ向かう地下鉄の中、「日本は安全」であることを思いつく限りの事例とともにメールを打つ。

[2月17日（月）] 東京マラソンの中止が発表された。謙さんに「初日は開けられそうか」と聞かれる。「開けますよ！」と答える。

[2月27日（木）] 前日に政府が発表した「今後2週間のイベント中止要請」について、稽古開始前に演出家へ説明をする。『ピサロ』の初日は3月13日だから、初日は開けられる、「開けます」と。しかし俳優陣は不安そうである。稽古後、キャスト・スタッフへ伝えたことは、『13日に初日を開けるためにはまずは全員が健康であること。そのためにはうがい・手洗い、うがい・手洗い。今はこれしかない。地震が起こるかもしれないし、どこかの国からミサイルが飛んでくるかもしれない。その都度、よき選択をします』と。『だからまずは初日に向け、頑張りましょう』と。

一方で、『フォーチュン』北九州公演は明日28日からの公演中止が決まった。続々とこの期間の公演中止が発表されていく。知り合いのプロデューサーから電話が入る。「PARCOは開けるでしょ！開けなきゃだめよ！」と。本当に2週間で状況は変わるのだろうか。好転することを祈るしかない。

[2月28日（金）] 制作助手から悲鳴が上がる。ティッシュペーパー、ウェットティッシュなどの除菌グッズが売り切れとのこと。また買い占めが始まったのか。でも、なんでティッシュペーパー？　帰りにスーパーに寄った。本当だった。

[3月4日（水）] 稽古場最終日。初日に向け、皆は一丸となって作品の仕上げに入っている。そんな中、さまざまな感染予防策を具体的にしていく必要を感じる。どうやったら公演が実施できるのか、そして彼らの健康を維持できるのか。皆に伝えたことは、公演中の終演後の楽屋面会を禁止すること。中には初舞台の若者もいる。きっと両親が観に来るのだろう。終演後の楽屋の風景が頭をよぎった。胸が痛んだ。

[3月9日（月）] 心のどこかで初日が延期になることを予測していた。「これは経済活動である」と強く思った。初日が延期となった場合の休演分の公演回数をやらなければ、と。スケジュールの打診を始める。矛盾との闘い。初日を開けると言いながら、最悪の状況に備える。これがプロデューサーの仕事。

PARCO劇場
オープンニング・
シリーズ
『ピサロ』
作／ピーター・シェーファー
翻訳／伊丹十三
演出／ウィル・タケット
2020年3月20日～27日 PARCO劇場
写真左より／渡辺 謙、宮沢氷魚
撮影／阿部章仁

無断転載禁止